

C.L. information

Vol.62 2017年1月

特 集

◆ 今冬注意すべき感染症

～インフルエンザ、鳥インフルエンザ、ノロウイルス～

害虫紹介（ヒョウホンムシ類）

食中毒情報



株式会社コントロール・ラボ

今冬注意すべき感染症

インフルエンザの流行が全国的に本格化しています。また、鳥インフルエンザやノロウイルスにも警戒が必要になってきています。そこで、今回の C.L.information では、これらの冬に注意すべき感染症について紹介させていただきます。

インフルエンザ

インフルエンザは、感染後 1～3 日の潜伏期間の後に症状が現れ、通常は 10 日前後で症状が落ち着き、治癒します。インフルエンザと風邪は症状など共通する点もありますが、以下のような違いがあります。

	インフルエンザ	風邪
原因	インフルエンザウイルス	様々なウイルスや細菌（200 種類以上）
症状	38 度以上の高い発熱	通常は 37 度～38 度の発熱
	咳、くしゃみ、鼻水などの呼吸器症状に加え、関節痛、筋肉痛、倦怠感などの全身症状を併発	咳、くしゃみ、鼻水、喉の痛みなどの呼吸器症状が主
	急激に発症	比較的緩やかに発症
流行時期	冬季（12 月～2 月）に多い	1 年を通じて散発

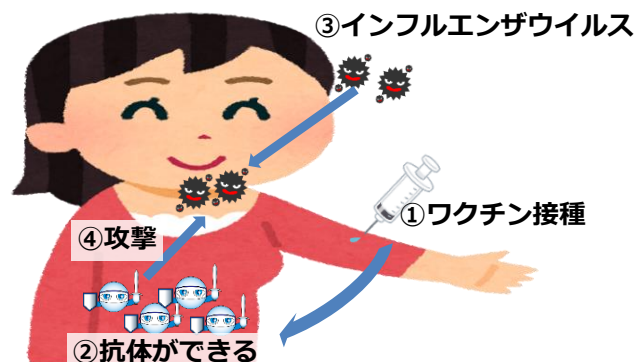
インフルエンザは、喘息などの基礎疾患がある人、乳幼児や高齢者などの免疫力の低い人などは重症化する可能性が高く、肺炎や脳炎などを合併することがあるため、特に注意が必要です。

ワクチン

インフルエンザから身を守るには、手洗い・うがい・マスクの着用なども大切ですが、ワクチン接種が効果的です。ワクチンは、インフルエンザが発症する可能性を減らす効果、重症化するのを防ぐ効果があります。

ワクチンで予防できる仕組み

通常は、ウイルスが体内に入ると体内で増殖して発病してしまいますが、右の図のように、①事前にワクチンを接種しておけば、②ウイルスから身体を守ってくれる「抗体」が出来るため、③ウイルスが体内に入っても、④抗体がウイルスを攻撃して体内で増殖するのを防ぐことができます。この抗体は、ウイルスの型ごとに異なるため、毎年流行するウイルス型を予測してワクチンの組み合わせが変更されています。



2016-2017 年のインフルエンザワクチンの種類

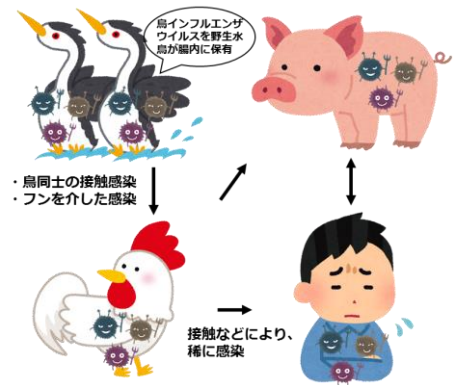
ワクチンは、昨シーズンより 3 価から 4 価のタイプに変更されており、ワクチンで予防できるインフルエンザウイルスの型が増えています。今シーズンのワクチン製造に使用されているウイルスは右の 4 種類です。国立感染症研究所により、国民の各ウイルス株に対する免疫状況が調査されており、免疫を持っていない人が多い年齢層（要注意年齢層）に対して注意喚起がされています。

表 2016-2017 年インフルエンザワクチンの使用株

使用ウイルス株	要注意年齢層
A カリフォルニア型	0-4 歳、60 代後半以上
A 香港型	0-4 歳、40-60 代前半、70 歳以上
B 山形系統	0-4 歳、60 歳以上
B ビクトリア系統	全年齢層

鳥インフルエンザ

鳥インフルエンザとは、A型インフルエンザウイルスが鳥類に感染することで起こる病気で、養鶏場などで問題になっています。特に、伝播力が強く致死性が高い「高病原性鳥インフルエンザ」の場合、家畜伝染病に指定されており、防疫措置をとることが定められています。発生した場合、発生した農家だけでなく、養鶏産業全体への影響が大きくなっています。



発生状況

昨年 11 月に青森県の家禽農場、新潟県の養鶏農場で高病原性鳥インフルエンザ（H5N6 亜型）の感染が確認されました。2003 年以降、アジアからヨーロッパ、アフリカへと広がり、日本でも頻繁に発生するようになってきています。海外からの渡り鳥による持込みだけでなく、人や物を介した侵入も考えられるため、国内にウイルスが侵入してくるという前提の下で予防対策をしていくことが重要です。

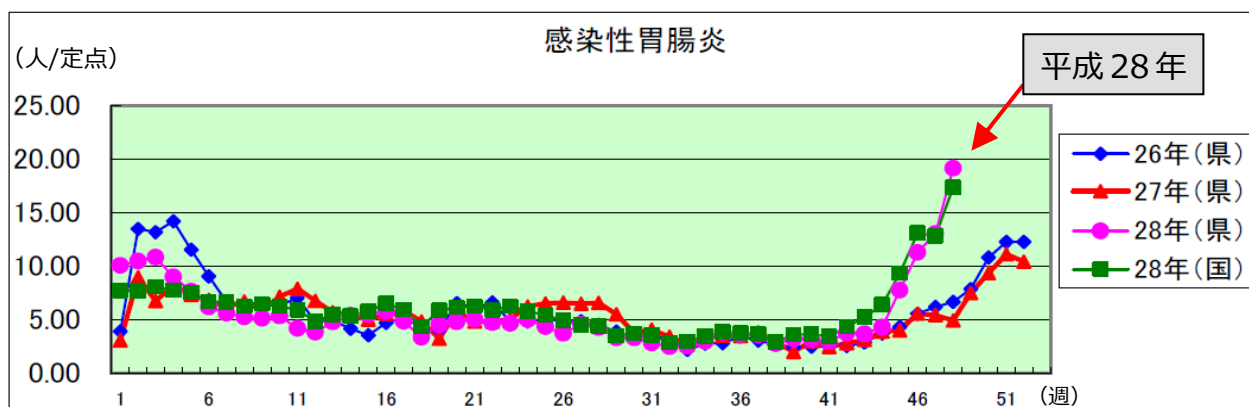
予防対策

各関係機関が、次のような調査や対策を実施しています。

- 環境省 渡り鳥の飛来経路の解明・飛来状況の調査、野鳥の糞便検査 など
- 農林水産省 家禽のための衛生管理ガイドラインの作成、飼養衛生管理基準の設定 など
- 都道府県 農場の検査 } 農家の防疫意識の向上、定期的な健康観察、
衛生管理区域の設定や消毒の徹底、防鳥ネットによる野鳥の侵入防止など

ノロウイルスが大流行の兆し、食中毒に注意！

ノロウイルスなどを原因とする感染性胃腸炎の患者が 11 月中旬より急増しており、今シーズンは近年で最も流行した 2012 年と同じペースで報告されています。各地で感染性胃腸炎の患者報告数が警報基準値を超え、警報が発令されています。



感染性胃腸炎の感染報告の推移 (引用：静岡県環境衛生科学研究所感染症情報センター)

感染者が多く、**ノロウイルス食中毒も発生しやすい状況**になっているため、調理従事者の健康管理などの強化が必要です。

各種ノロウイルス検査、環境殺菌は弊社までご相談下さい。

害虫紹介

ヒョウホンムシ類

食品を加害する害虫には冬季でも活動する種が知られています。ヒョウホンムシ類は特に冬季に発生の増える害虫で、一般住宅で発生する事もあります。

生態

ヒョウホンムシ類は体長 2～5mm 程の甲虫の仲間で、この名前は動植物の標本を食害する事に由来します。日本では 7 種が知られ、ニセセマルヒョウホンムシ、ナガヒョウホンムシ、ヒメヒョウホンムシが主で、乾燥した動植物質を好んで餌とします。耐寒性があり、初冬～春にかけて発生する種が多いです。一部の種を除いて移動能力に乏しく、後翅が退化していて飛翔することが出来ません。

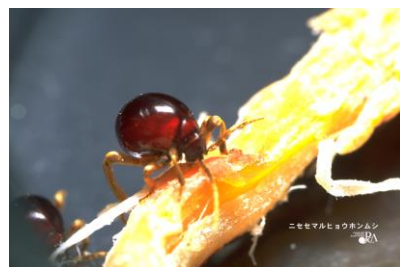


図 ニセセマルヒョウホンムシ
Gibbium aequinoctiale

被害

動植物の標本や米ぬか、トウモロコシ粉、小麦粉、煮干し、ペットフードなどの乾燥した貯蔵食品を食害するほか、毛織物なども加害します。また、殺鼠剤に配合されている種子やパン粉が発生源となる事があります。自然環境では、ネズミの糞や乾燥した動物死骸を餌としており、鶏糞乾燥場で大量発生した例が報告されています。食品工場などの食品庫で発生して問題となる事が多いですが、一般住宅の天井裏で発見される事もあります。直接的に人に危害を加える事はないですが、異物混入の原因となり、大量発生して不快感を与える場合があります。

対策

ヒョウホンムシ類の好む食品は気密性の高い容器で密閉して保管し、こぼれた食品残渣などを定期的に清掃によって除去する事が大切です。動物標本などは衣類害虫用の防虫剤とともに保管する事で被害を予防できます。また、成虫はピレスロイド系のエアゾール剤で駆除が可能です。ネズミが生息している場合、その糞から発生するため、併せてネズミの駆除が必要です。

食中毒情報

ノロウイルスによる食中毒が多い状況が続いています。発生場所は、飲食店、ホテル、仕出し弁当、給食など様々です。今シーズン流行しているノロウイルスの遺伝子型は、昨年流行した GⅡ.17 型ではなく、GⅡ.2 の変異型で、80%以上がこの型と言われています。遺伝子変異により流行しやすくなっていると考えられ、今後もこの状況が続くことが予想されます。予防のためには、ノロウイルス検査は必須の項目になってきています。まだ取り組めていない事業所があれば、ご相談ください。また、今月はクマ肉に寄生していた旋毛虫による食中毒も発生していました。国内での発生は、35年ぶり4例目になります。今回は、加熱不足が原因と考えられています。野生鳥獣を食材として使うジビエ料理では、特にこのような寄生虫による食中毒に対しても、より注意を払うようにして下さい。

全国食中毒発生状況 (12/15～1/15 新聞発表分)

原因物質	事例	感染者数
ノロウイルス	58	1715
カンピロバクター	9	48
自然毒	6	7
寄生虫	4	18
不明・その他	5	104

株式会社コントロールラボ

本社 〒651-1211 神戸市北区小倉台7-1-7
 阪神事業部 〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町2-4-15
 東京営業所 〒194-0004 東京都町田市鶴間424-1-402
 福岡営業所 〒816-0921 福岡県大野城市仲畑1-6-15-A棟3
 フリーダイヤル

☎0120-540-643

URL <http://controllabo.co.jp>

TEL: 078-582-3575 FAX: 078-582-3576
 TEL: 078-858-6801 FAX: 078-858-6802
 TEL: 042-799-5270 FAX: 042-850-6456
 TEL: 092-575-0630 FAX: 092-586-6321



株式会社コントロールラボ



エムテック衛生検査所